No.32 H25.1.1　発行 白陵会

Alma Mater 白陵

■白陵会事務局　〒676-0827 高砂市阿弥陀町阿弥陀2260（白陵高等学校内）　TEL.079（447）1675（代）FAX.079（447）1677
URL:http://www.hakuryokai.jp　E-mail:info@hakuryokai.jp

会長
沼田好道

母校讃歌

母校が盛大に創立50周年を迎えたことは無上の喜びであり、一期生から四十七期生まで総勢8062名の白陵会員を代表し心よりお祝いを申しあげます。50年の歳月の中には、バイタリティーと情熱の塊であった創設者・三木省吾園長先生や学校の発展に尽くされた第六代校長・吉田卓先生の急逝という予想だにしなかった大変悲しい出来事もありましたが、名門校への驚嘆すべき発展の軌跡は、教職員と生徒の年々歳々の努力の積み重ねであり、正に積小為大、今日より顧みて誠に感慨無量なるものを覚えます。創設者三木省吾先生は建学の精神について、「本学園は人本主義の精神に則り、研究と訓練・独立不羈・正明濶達を校是として、将来深遠なる洞察力と高い学職を持ち事に当たって責任感と勇猛心ある人材たるの基礎を培うことを本学園創設の本旨としております」と述べておられます。人が中学・高校時代に授けられるべき教育の重要性を思うとき、白陵生が共通して体得するこの建学の精神こそが白陵最大の特徴であり、卒業生一人一人にとっては大きな財産となっております。50周年を迎えた今日、大勢の卒業生が各界のリーダーとして大車輪の活躍をされていることは、まさに白陵が目指した教育が結実した証左であります。旧制姫路高等学校の衣鉢を受け継いだ白陵という校名はこの50年間で広く全国に知られたところでありますが、新たな門出に際し母校が教育の殿堂として益々発展されますよう祈念申しあげます。

目　次

創立50周年記念 特別号

同窓会長挨拶…… 1
理事長挨拶・校長挨拶…… 2
主要大学合格者数推移…… 3
学園創立50周年寄付金期生別一覧表
白陵会役員名簿
創立50周年記念式典特集 … 4～5
50周年記念誌より転載
　卒業生座談会…… 6～21
　スペシャルインタビュー…22～27
収支決算報告書・会務報告……28
第5回東京白陵高校同窓会報告
白陵会名簿発行予告
白陵会物故者・転退職教員紹介
編集後記

理事長
三木一正

ご　挨　拶

新年明けましておめでとうございます。

1963年（昭和38年）学園創設、その年の4月開校した白陵も創立50周年を迎えました。昨年11月の創立50周年記念式典では、沼田同窓会長に慶詞をいただき、9期山本亮三氏（兵庫県会計管理者）には、兵庫県知事代理としてご出席いただくなど、盛大に執り行うことができました。

1966年に第1期生として卒業生121名を送り出してから、昨年の第47期生で卒業生数が8,062名となりました。それに、白陵創設13年後に姉妹校として誕生した岡山白陵の卒業生5,050名を加えると、何と13,112名を数えるに至ります。

“園長”の呼び名で親しまれていた三木省吾初代理事長が急逝したのが、1983年（昭和58年）の7月15日ですから、白陵創設後21年目、享年52歳の時のことでした。本人が目指していた旧制高校の夢の実現にむけ、精一杯努力し、日常の学校経営に取り組んでいたところでしたから、その口惜しさは察するに余りあります。もし元気でいたら、今の白陵をどうみているでしょうか。いずれにしろ、教育現場は人創りを基本としていかなければなりません。創設者の目指す教育ができているかどうか、半世紀を越えた新年の始めに改めて誓いをたて、次代への若者たちの育成に更に努力していきたいと思っております。

最後になりましたが、同窓会の皆様のご健勝とご活躍を祈念し、今後とも変わらぬご支援ご鞭撻の程お願い申し上げ、ご挨拶といたします。

校長
斎藤興哉

五十周年と白陵らしさ

白陵中学校・高等学校の創立50周年記念行事は、式典はもちろんのこと、『記念誌』の編集もその他関連の行事も成功裏に終わることができました。

白陵会からはいろいろとご支援をいただき、まことにありがとうございました。『記念誌』も立派な内容に仕上がりました。それなのに、肝心の記念式典には出席を希望する方をあまりお招きすることができず、申し訳なく思っています。

私自身今回驚き、心うたれたことが二つあります。私は、二学期になるとすぐ式典に向けて準備の段取りを定め、学校が一体になって取り組むべきだと考えました。しかし、実際に準備が始まったのは本当に間近になってからなのに、その全体の動きはスムーズかつ入念を極めていました。生徒の予行演習がないのもびっくりしました。それでいて、生徒はちゃんとこなせるのです。先生方の注意が全くなかったというわけではありませんが、式典の前日も翌日も、授業を全部実施している中での生徒の集中力には、改めて舌を巻きました。当然、式典・公演等には各方面からお褒めの言葉を頂戴しました。

もう一つ、関連の事業では、まず『記念誌』の構成・内容の見事さが特筆に値します。形式的なものでなく、白陵50年の歴史を多くの視点でとらえようと努めています。さらに加えて、各種講演会や催し物の多彩さ。今回は特に伝統を考え、白陵の歴史を並べてみようという観点からの企画がなされました。

そういう本校の歴史は、代々の生徒が主役となって築いてきたのですが、改めて故学園長と現理事長のリーダーシップの大きさを思わざるを得ません。わずか50年でこれだけの実績を積み上げてきたというのは一種の奇跡とも言えるもので、すでに白陵の進むべき方向はしっかり定まっているということです。

それだけにあとを継ぐ教職員・生徒の責任は大きいものがあり、今回の一連の催し物は、それを再確認するためのものであったと言うこともできましょう。次なる70周年、100周年に向けて、今日明日の一日一日の努力から再出発したいと思っているところです。

主要大学合格者数推移

『50周年記念誌』資料編のデータを基に集計しました

国公立大学（文科省所轄外の大学校を含む）

大学名＼卒業期生（年）	1期～10期 昭41年～昭50年	11期～20期 昭51年～昭60年	21期～30期 昭61年～平7年	31期～40期 平8年～平17年	41期～47期(7年) 平18年～平24年	合計
東京大学	8	59	228	284	156	735
京都大学	29	139	191	199	128	686
大阪大学	27	81	205	220	133	666
神戸大学	70	166	157	150	114	657
北海道大学	7	35	53	36	25	156
東北大学	3	21	66	24	3	117
一橋大学	1	13	30	45	29	118
名古屋大学	2	14	12	22	15	65
九州大学	0	9	25	15	20	69
岡山大学	28	52	42	50	44	216
大阪市立大学	16	37	51	32	29	165
他国公立大学	628	695	633	577	468	3,001
国公立大学計	819	1,321	1,693	1,654	1,164	6,651

私立大学

大学名＼卒業期生（年）	1期～10期 昭41年～昭50年	11期～20期 昭51年～昭60年	21期～30期 昭61年～平7年	31期～40期 平8年～平17年	41期～47期(7年) 平18年～平24年	合計
早稲田大学	66	194	224	302	178	964
慶應義塾大学	44	162	209	297	161	873
関西学院大学	232	231	194	236	145	1,038
関西大学	212	131	106	108	54	611
同志社大学	180	253	162	222	188	1,005
立命館大学	136	71	90	209	187	693
他私立大学	872	573	536	619	664	3,264
私立大学計	1,742	1,615	1,521	1,993	1,577	8,448

卒業生数	1,527	1,606	1,783	1,880	1,266	8,062

学園創立50周年 寄付金期生別一覧表

（平成24年12月12日現在）

期生	人数	金額（円）	期生	人数	金額（円）
1	4	120,000	25	2	25,000
2	7	450,000	26	2	10,000
3	8	805,000	27	2	20,000
4	3	20,000	28	2	15,000
5	11	100,000	29	2	20,000
6	5	85,000	30	1	10,000
7	4	40,000	31	2	15,000
8	3	25,000	32	1	10,000
9	5	85,000	33	0	0
10	5	80,000	34	3	25,000
11	6	135,000	35	2	15,000
12	5	45,000	36	1	5,000
13	3	135,000	37	5	140,000
14	6	65,000	38	0	0
15	6	60,000	39	2	15,000
16	1	10,000	40	4	25,000
17	5	85,000	41	1	30,000
18	5	35,000	42	4	50,000
19	3	20,000	43	1	10,000
20	3	30,000	44	0	0
21	3	30,000	45	6	45,000
22	2	15,000	46	3	20,000
23	4	50,000	47	6	40,000
24	1	20,000	合計	160	3,090,000

白陵会役員名簿

役名	期	氏名	役名	期	氏名	役名	期	氏名	役名	期	氏名
会長	3	沼田　好道	常任幹事（総務）	9	鄭　幸男	常任幹事（総務）	32	酒井　勇人	常任幹事（総務）	45	向原　沙紀
副会長	2	湖中　明憲	〃（総務）	10	加藤　雅宣	〃（総務）	32	小澤有紀子	〃（総務）	46	藤本　美希
〃	3	天野　泰文	〃（研レ）	12	吉野　太司	〃（総務）	33	藤井　拓郎	〃（総務）	46	宮脇　規壽
〃	6	上田　喜裕	〃（広報）	13	矢野　善人	〃（総務）	33	北尾由美子	〃（総務）	47	戎　直哉
理事（研レ）	3	神吉　裕資	〃（総務）	14	片山　安孝	〃（総務）	34	八尾　晋典	〃（総務）	47	中谷　英巴
〃（総務）	4	岸本　和男	〃（総務）	14	竹中　邦夫	〃（総務）	34	牧野　琢丸	校内幹事（広報）	1	芳木　健憲
〃（研レ）	5	橋本　義仁	〃（総務）	16	田中　正一	〃（総務）	35	石川　美帆	〃（総務）	2	大内　義博
〃（研レ）	6	大崎　章快	〃（総務）	18	秋田　直樹	〃（総務）	35	阪本　覚	〃（総務）	3	長濱　憲雄
〃（研レ委員長）	9	村角　伸一	〃（総務）	19	牛尾　英樹	〃（研レ）	35	中村　亮太	〃（総務）	3	黒田　洋
〃（総務）	10	吉田　達哉	〃（総務）	21	河合　恵介	〃（研レ）	35	安田　孝弘	〃（総務）	6	福井　孝昌
〃（広報委員長）	10	下村　康夫	〃（総務）	22	新田　智弘	〃（HP）	36	杉岡　央基	〃（総務）	11	小紫　一貴
〃（広報副委長）	11	志方　正彦	〃（研レ）	22	野津　康弘	〃（総務）	37	伊賀真紀子	〃（総務）	12	畔上　昇
〃（校内幹事総）	11	宮﨑陽太郎	〃（研レ）	23	中里　寛	〃（HP）	37	亀山　信生	〃（総務）	12	山口　透
〃（総務）	13	飯島　義雄	〃（総務）	24	奥本　光廣	〃（総務）	38	上野　紘之	〃（総務）	12	中村　大吾
〃（研レ副委員長）	15	町田　直隆	〃（総務）	24	藤原　省悟	〃（総務）	38	堀　素史	〃（総務）	13	水田　堅
〃（会計・HP委員長）	19	尾上　尚樹	〃（総務）	25	多根　正明	〃（総務）	39	猪股久美子	〃（総務）	14	久保　博彦
〃（総務）	20	石井　秀武	〃（HP）	26	大西　康記	〃（総務）	39	根木　厚	〃（総務）	15	村上　幸生
書記（総務）	17	岡野　清和	〃（総務）	27	山田　将義	〃（総務）	40	赤澤　剛	〃（広報）	15	西　善弘
会計監査（広報）	23	三木　健史	〃（総務）	28	柿本　晴彦	〃（総務）	40	山本　祥子	〃（総務）	37	神尾　祐輔
〃（研レ）	36	近藤　理恵	〃（総務）	28	松本　守弘	〃（総務）	41	山本　梨加	顧問（理事長）		三木　一正
常任幹事（総務）	1	芝本真須美	〃（HP）	29	岡田　康裕	〃（総務）	41	脇田　直人	〃（校長）		斎藤　興哉
〃（総務）	1	武田久美子	〃（研レ副委員長）	29	浜田賢太郎	〃（総務）	42	賀川　拓哉	〃（教頭）	2	川副　義文
〃（総務）	1	正井　和野	〃（総務）	29	山下　展成	〃（HP）	42	宮﨑はる香	〃（元会長）	1	遠山　寛
〃（研レ）	4	森崎　晴知	〃（総務）	30	上新　貴弘	〃（総務）	43	片岡　寿平	〃（元会長）	1	黒坂　康夫
〃（総務）	5	塩崎　育男	〃（研レ）	31	後藤　大悟	〃（総務）	43	野瀬　彩弥	〃（前会長）	1	黒川　芳一
〃（総務）	7	萩本　義郎	〃（総務）	31	酒井　雅史	〃（総務）	44	立田　裕昌			
〃（総務）	8	前川　裕司	〃（総務）	31	木下　智晴	〃（総務）	44	三木　綾子			
〃（総務）	8	黒川　仁	〃（総務）	31	村山　稔	〃（総務）	45	三浦　学登			

（平成24年6月23日現在）

創立50周年記念式典特集

■平成24年11月9日（金）創立50周年記念式典・祝賀会

平成24年11月9日、記念棟に在校生、教職員、学校関係者並びに各界来賓ら約1300人が参列し、三木学園・白陵中高の創立50周年記念式典が盛大に挙行され、半世紀の歩みを振り返るとともに新たな門出を祝いました。同窓会からは沼田会長以下理事や各期の役員が出席して喜びを共にしました。

式典はブラスバンド部の晴れやかなオープニング演奏で始まり、国歌斉唱、黙祷の後、三木一正理事長の式辞を斎藤興哉校長が代読し「創設者の急逝など幾多の苦労もあったが、職員・生徒が力を合わせて学校を支えてきてくれたお陰で50年の区切りを迎えることが出来た。今後も日本の国の前途を誤らず、四季のわかる細やかな心を持ち、国際社会に通用する逞しい人材の育成に邁進したい。本校を巣立ちゆく者は、常に上をめざし福田赳夫元総理大臣から戴いた扁額“威而不猛”の精神を身につけてほしい」と述べられました。次に来賓を代表して、井戸敏三兵庫県知事（代読、山本亮三兵庫県会計責任者（9期生））、西門義博兵庫県私学総連合会会長、登幸人高砂市長、石見利勝姫路市長からそれぞれ祝辞が寄せられました。次に学園創立並びにその後の学園の発展に尽くされた学園理事の山田忠史理事に特別功労表彰、元原利文理事、三木茂子理事、前川五良監事にはそれぞれ功労表彰が贈られ、永年勤続表彰として40年以上勤続の若下由紀事務長、芳木健憲先生（1期生）、川副義文教頭（2期生）、山本洋一先生、大内義博先生（2期生）、黒田洋先生（3期生）の６名をはじめとし、勤続30年以上の17名、勤続20年以上11名の教職員がそれぞれ表彰を受けられました。続いて、沼田好道同窓会長、野添正彦育友会長（18期生）、金本昌大生徒会長の3名が慶詞を述べましたが、生徒会長の金本君（高2）は、「よき先輩に恵まれた学舎で過ごせるのはこの上ない喜び。多くの先輩方が築かれた白陵の校風、建学の精神を引き継ぎ、国際的で幅広い視野を身につけ日本に貢献できる人材になりたい」と喜びの決意を語り、最後に斎藤興哉校長が謝辞を述べられ、全員で高らかに校歌を斉唱して記念式典は晴れやかに終了しました。この日の出席者には、『50周年記念誌』と記念品に添えて、50周年を祝う全段広告が掲載された当日の神戸新聞が配布されました。

その後、体育館において華やかに記念祝賀会が催されましたが、各会の名士の方々よりお祝いのスピーチがあり、校舎新築建替で地固めの四股を踏んでいただいた大相撲井筒部屋の大関・鶴竜関（2006年6月14日新校舎地鎮祭当時は十両）と井筒親方も出席し錦上華を添えました。最後に旧制姫高の大先輩と白陵卒業生が、制帽と揃いの法被でステージに上がり、高らかに序詞を吟じ、幣衣破帽蛮カラ風にああ白陵の春の宵で始まる寮歌「白陵歌」を力強く歌い大いに盛り上がった一日を締めくくりました。

■平成24年6月26日（火）記念落語会
桂阿か枝氏、桂吉弥氏

桂阿か枝氏（本名：岸本浩一氏・25期生）は、明石市出身で岡山大学卒業後、民間企業に勤めたが落語への思いが募り故５代目桂文枝に入門されたそうです。この日、母校の記念棟に特設された高座に上がった桂阿か枝さんは「厩火事」を、ＮＨＫ連続テレビ小説「ちりとてちん」に出演された桂吉弥さんは「ちりとてちん」をたっぷりと披露してくださいました。

■平成24年9月25日（火）記念講演会
講師　第36代 木村庄之助氏
演題　「努力は実る」

財団法人日本相撲協会井筒部屋所属の立行司第36代木村庄之助氏の講演会が記念棟で開催されました。木村氏は講演会の２日前に行われた大相撲９月場所千秋楽で、日馬富士が白鵬を破って２場所連続で全勝優勝を決めた結びの大一番を裁いた行司さんです。日本の伝統国技である大相撲のしきたり、行司の最高位に就くまでの修行などの興味深い話で相撲の魅力に引き込まれる講演でした。

■平成24年10月30日（火）記念講演会
講師　冷泉貴実子氏
演題　「和歌に詠まれた四季と年中行事」

公益財団法人冷泉家時雨亭文庫の常務理事である冷泉貴実子氏をお迎えして、和歌の話をしていただきました。

次々と移り変わる自然の姿と当時の人の思いが、31文字で巧みに表現され、それが普遍的な様式の美となって日本人の心を魅了してきました。それらの秀歌は長い年月を経ても色あせることなく、私たちに親しまれています。

冷泉家は、藤原定家の末裔として、今も京都で俊成・定家以来の和歌を中心とした文化を守り、育んでおられるのです。

■平成24年11月10日（土）記念演奏会
大阪フィルハーモニー交響楽団

大阪フィルハーモニー交響楽団の演奏会は創立25周年（高砂文化会館）、創立40周年、平成20年（記念棟）に続いて４回目となります。高関健氏の指揮でスッペ／喜歌劇「軽騎兵」序曲、ショーソン／詩曲、サン=サーンス／序奏とロンド・カプリチオーソ、ドヴォルザーク／交響曲　第８番　ト長調　作品88の生演奏に会場全体が酔いしれました。

■平成24年11月17日（土）記念公演会
坂東大蔵氏日本舞踊公演会

日本舞踊で活躍されております坂東大蔵氏をお迎えし、日本舞踊公演会が実施されました。坂東氏は故三木省吾学園長、三木一正現理事長と同級で、2009年に姫路市芸術文化大賞、2010年に兵庫県文化功労賞を受賞されています。当日は坂東呂扇氏他お弟子さん方も多数出演され「高砂の浦」、「箏曲　さくらさくら」「サン=サーンス作曲　白鳥」「日本舞踊史」「義太夫清元　吉野山」「長唄　鷺娘」を披露いただきました。50周年を彩った記念行事は、日本の伝統文化であるこの華やかな日本舞踊公演で幕を閉じました。

創立50周年特別号として６頁からの「卒業生座談会・第一部～第三部」及び「スペシャルインタビュー」は、学校法人三木学園白陵中学校・高等学校より平成24年11月9日に発刊された『50周年記念誌』の中から学校当局の許可を得て本会報に転載しました。なお、掲載者のプロフィールは記念誌制作当時のものです。

卒業生 座談会 第１部

新春 「かしまし」編

どちらかといえば無骨なイメージの強い白陵ですが、その学園には野山に咲く様々な花だけでなく教室にも美しい花々が咲いています。そして2012年1月、かつては教室を彩った花たちに再びこの学園に集まっていただきました。

武田久美子 さん
（旧姓位田）
1期生
武田建装勤務
学園創設期の三木学園長の意外な一面を知る。高砂市在住。

今井眞理子 さん
（旧姓田中）
3期生
今井歯科勤務
妹、弟も卒業生。長男も卒業生ということで現在後援会副会長でもある。豊岡市在住。

清村　千鶴 さん
（旧姓松岡）
13期生
ファイザー㈱勤務
ウーマン・オブ・ザ・イヤー 2010キャリアクリエイト部門受賞。さいたま市在住。

木村　智香 さん
（旧姓荻野）
21期生
おぎの耳鼻科勤務
長男が高1に長女が中1に、在学中。加古川市在住。

田村奈美子 さん
（旧姓横山）
34期生
神戸税関勤務
北海道修学旅行最後の学年。姉も卒業生。神戸市在住。

小紫　悠子 さん
（旧姓水野）
40期生
三井住友カード勤務
文化委員長として活躍。兄も卒業生。大阪市在住。

田中美彩子 さん
43期生
東京大学法学部4年在学
卓球部所属。今春から外務省勤務。妹も卒業生。姫路市出身。

※参加者名は卒業期順に座談会当日現在で紹介しています。

今井　「白陵創立50周年」ということで、47期の卒業生の中から、女子だけの座談会をということになり皆さんに集まっていただきました。皆さんが感じられたり、経験されたりした思い出話をお話しいただけたらと思います。それではこの会の進行役を私が務めさせていただきます。よろしくお願いします。

在学時の思い出は…

清村　学年に女子が6人しかいなかったのは、他の学校とは違って一種独特の雰囲気でした。

　それから、園長先生という大きな存在があったため生徒たちは団結していましたね。それに、卒業後に集まった時に思い出話に事欠かない学校だと思います。あの時園長先生がああだったこうだったとか、他の学校では考えられないことが起こったりと、ユニークで、ある意味ひどい学校だったんですかね(一同笑)。けど、どこか温かいところがあった気がします。

武田　今だから言えるんですが、実は3年の夏休みにアルバイトをさせてもらいました。園長先生に姫路の法務局のほうにバイトに行きたいと申し出たら、「就職するならそれも社会勉強だから内緒で行って来い」と言われたんです（一同驚＆笑）。それから、卒業する時に園長先生に「料理学校だけは行っとけよ。結婚して旦那が浮気をしても料理が上手かったら絶対に帰ってくるからな」と言われたのを覚えています。まだ夫唱婦随の、良妻賢母の時代でしたから（一同爆笑）。怖かったけど人間味があり、情が厚かったですね。

木村　私たちが高1の7月に園長先生が亡くなられたんですが、高校入試に合格した後の春休みに園長先生の英語の補習があって、毎日単語の試験がありました。その時に、できなかった分お尻を叩かれたのがすごく印象に残っています。最近も同窓会があって、その時に話題になったのが、朝、スクールバスが来た時に園長先生が乗っているかどうか確かめて、もし乗っていなかったら万歳してたという話です。

清村　私たちも同じです。スクールバスが見えてきたら窓のところに皆押し寄せてきて、園長先生がいないのがわかったら学校中から「うお～」という歓声が上がりましたね。

木村　だから今の在校生が足の怪我をしたり体調悪かったりしたら「バス乗せてもらお」みたいに言うようですが、その感覚が私たちからしたら信じられないですね。あのバスの座席というのは近寄りがたい場所ですからね。

今井　園長先生には人としての生き方も教わった気がします。32歳でこの学校を作ろうと決心されたというのは本当にすごいことだと思うんです。それに、ある時園長先生が予習をしてきていない生徒に「どのように教えようかとワシは予習してきているのに、なんで教わるキミらがしてきてないのか」と怒られたんです。それを聞いたときに、本当に教えることに情熱をもっておられ教わるものの心構えにも一生懸命な方だと感じました。

田中　私たちはもちろん園長先生は知らないですが、中2の文化祭で園長先生の幽霊が現れて在校生に説教するという劇をやったんです。直接は知らないですが、今の先輩方のお話を聞いていて不思議な親近感がわきました。

柔道もやりましたよね…

今井　私ら3期生はまだ柔道がなかったんですよ。

清村　私たちはありましたが、藤田先生に掃除がいいか柔道がいいか聞かれた覚えがあります。ずっと掃除するくらいなら柔道のほうがよかったのでやりましたけどね。

田村　私たちの時は高1、高2とありましたね。

今井　女子は女子同士でするんですか。

小紫　基本的には女子同士ですが、女子の人数が奇数だったりしたら、ちょっとか弱い男子とすることもありました（笑）。それから、私たちの時は授業を受けるだけで初段がもらえたというのはすごくうれしかったですね。就職活動の時に「柔道初段です」というだけで注目してもらえました。就職してからも上司にヤワラちゃんと呼ばれてかわいがってもらえましたね。

清村　そりゃ面接で「柔道初段です」なんて言ったら一目置かれるでしょうね。白陵出身の女子は有利ですね（笑）。

女子の存在は…

武田　最初は女子の扱いに苦慮されたと思いますよ。1期生は女子が11人ですが、ちょっと厚かましかったですね。プレハブ時代のトイレの中は左右に分かれていましたが、出入り口は一ケ所で女子は堂々と使用していましたね。男子の中には気後れしていた人もいたと思います。すごく大事にしていただいた気がします。

今井　3期生は60人くらいいましたよ。私は理系だったのでクラスには2人だけでしたけど。だから、冬とか帰りが遅くなると男子の何人かが必ず声をかけて一緒に帰ってくれたんですよ。優しかったですね。

田村　私たちはまだ高校から2クラス入っていた時代ですが、全部で40人くらいでしたね。

小紫　私たちは中学から女子をとり始めて2年目だったんですが、中学のときは35人くらいでしたね。それで高校から20人ちょっと入りましたから合わせて60人くらいだったと思います。

清村　この前、川副先生からお聞きしたんですが、最近は女子は学年の3分の1だそうですね。白陵だけでなく、会社でも女子が3分の1になると半分以上いる感じがします。それくらい社会でも女性の存在感は大きいですね。

今井　先生方の女子と男子の指導の違いとかはありましたか。

木村　女子にとってはあまりえこひいきされてる感じはなかったんですが、男子から言わせると、「めちゃくちゃ女に甘かった」らしいです。

今井　社会の先生が質問に答えられなかったら頬をつねるんですよ。わからないのに答えるまでつねられて…嫁入り前の大事な顔やのに（笑）。

清村　話は変わりますが、ある日同級生の女子3人で学園道路を歩いていたら中学生の男子が校舎から「わー、女や女や」って叫ぶんですよ（一同爆笑）。その時に中学が男子校なんだというのを感じましたね。

木村　私の場合は弟が中学にいて、部活も同じだったので男子中学生には「姉ちゃん」と呼ばれ、家来のように引き連れていましたよ（笑）。中学生はかわいかったという印象です。けど、ある時、別に付き合ってるとかじゃなくて、たまたま男の子と歩いて帰ってい

たら、後から来た中学生が「男女交際禁止！男女交際禁止！」って叫びながら抜かして去っていきました（一同大爆笑）。

清村　同級生でも中学から上がってきたクラスと高校から入ってきたクラスではやっぱり雰囲気も違ってましたね。中学からのクラスの人は女子がいなかったというのもあったのか、女の子に優しい子が多かったなというイメージがあります。

卒業後に感じた「白陵」は？

小紫　他の学校と比べるのは難しいですが、すごい生徒同士の団結力が強い学校だと思います。卒業しても何かにつけて集まったりして同僚や上司からうらやましがられます。ただ、高2の修学旅行が、アメリカのテロとSARS（サーズ）の影響でロンドンじゃなくて北海道になったのが残念で、生まれ変わったらもう一度白陵に入ってみんなでロンドンに行きたいです。

田中　在校生の時は窮屈だなとか不自由だなと感じることはよくありましたが、卒業して違う世界に出て行った時に、逆にそれが何かをする時の原動力になっていると感じることが多かったです。たぶん生まれ変わっても白陵に入りたいと思います。

武田　本当にあの時の辛さとかを経験させてもらっていろんな意味で強くなったし、今体力的にも精神的にも充実した生活を送れているのもそのおかげかなというのはすごく感じています。

田村　勉強が大変忙しかったので、計画的に物事を進めていく癖がついたと思っています。次々とテストはあるし、先までスケジュールを立てずにはやっていけませんでしたからね。

木村　5分前集合というのがありましたよね。そういうのをまだ知らない時に集合時間の少し前に行ったら、「5分前ちがうやないか」と先生に言われて1時間正座させられました（笑）。それ以来今も「5分前に」というのを意識しています。それから、話は全然変わるんですが、子供が白陵に入ってくれて、自分がもう一度入学したような気分も味わえて、これからがすごく楽しみなんです。

清村　けど、自分が卒業した白陵がこんなにも立派な学校になっているというのがすごくうれしいですね。でも、これから白陵を出て社会へと入っていく人には、白陵らしいどこか型破りな、そしてやんちゃなところを持ち続けていってほしいです。

今井　今日お会いできて余計に思うんですが、素敵な後輩がたくさんいてくださって本当にうれしいです。

武田　本当にそうですね。私も今日それを一番感じます。今日この場にいられるのがすごく幸せです。ありがとうございました。

今井　話も尽きませんが、それではこれで座談会を終了させていただきます。本日は本当にありがとうございました。

（この座談会は平成24年1月7日に本校第1校舎5階の応接室にて実施しました。）

卒業生
座談会
第2部

国会議員
「未来発信」編

秋野 公造 氏
21期生
長崎県在住

長崎大学医学部卒。同大学院修了、長崎大学、米国シーダンス・サイナイ医療センター、厚生労働省に勤務。東京空港検疫所支所長。長崎大学客員教授。2010年の参議院議員選挙で公明党の比例代表（全国）区で初当選。

稲富 修二 氏
24期生（寮生）
福岡県在住

東京大学法学部卒。コロンビア大学院修了。
丸紅株式会社勤務。松下政経塾出身。2009年衆議院議員選挙で福岡2区選挙区で民主党から初当選。

岡田 康裕 氏
29期生
加古川市在住

東京大学工学部卒。ハーバード大学院修士課程。コンサルティング会社を経て政界へ。2009年衆議院議員選挙で兵庫10区選挙区で民主党から初当選。姉も卒業生。

司会
石井 秀武 氏
20期生
神戸市在住

神戸商科大学卒。
㈱長谷工コーポレーション勤務を経て、平成15年より兵庫県議会議員（３期目）民主党・県民連合議員団政務調査会長

※参加者名は卒業期順に座談会当日現在で紹介しています。

開 会

石井　母校の白陵高校は創立50周年を迎えます。「学校創立の本旨」は責任感と勇猛心ある人材の基礎を培うことであり、校是は「研究と訓練」・「独立不羈」・「正明濶達」であります。50周年の歴史の中で、その教えのもと、第一線で活躍している卒業生が大勢いるわけですが、特に今日は現職の国会議員として活躍している3名の卒業生に集まっていただきました。母校での思い出などを振り返っていただきながら、国政に携わっておられる皆さんからざっくばらんに今の「日本の政治」や「日本の未来」に向けての発信をしていただけたらと思っております。

在校中の白陵の思い出

石井　在校中でのもっとも印象深い思い出をあげてください。創設者三木省吾先生のこともお聞かせいただけたらと思います。

秋野　園長先生の授業が一番印象に残っています。顔を上げることが出来ない授業。目を合わせた瞬間、当てられて、叩かれるのが待っている。ずっと固まって下を向いて授業を受けていた思い出が忘れられないです。

けれど、園長先生の20周年のときの言葉が未だに頭から離れません。「私はまだ若い、まだまだ出来ることがいっぱいある」と、これから20年の明確なビジョン、構想を示されました。あのときの姿勢、勢いが鮮烈で、その勢いが今でも母校に残っていると感じます。熱意あふれた園長先生の生き方は今でも私の指針となっています。

思い出として残っているのは、中学の南九州への修学旅行です。明治維新の頃の国が変わるエネルギーに触れることができたのが勉強になってよかったですね。また卒業してから長崎に修学旅行で来てくれた白陵生を迎えたこともあります。それがうれしかったです。

稲富　園長先生は中1の時の夏、亡くなられました。入学前に、新館で園長先生自ら授業をされたときのことをよく覚えています。小さな用紙にびっしり書き込まれた英単語を100個覚えるというもので、そこからケッパンが始まりました。今、思い出しました（笑）。

寮生だったので、卒業式の後卒寮式があるのですが、在寮生が花道を作り、そこを握手しながら通って最後に寮監の先生、そう塩見先生です、と握手をするのですが、あの時は泣きましたね。

岡田　寮の話がうらやましいなと思います。そういうときの苦労された仲間は一生の宝となりますからね。片や私は通学生で、舞子から通学し、計1時間30分くらいかかっていました。だから、部活も残念ながらできませんでした。その上、小学校まで続けていた水泳もできず、思い出といえば、駅にいるときや電車の中で単語帳を見ていたことですね。あと、印象的なのはビンタですよね。私は園長先生を直接知らないのですが、藤田家将先生の愛情のこもった重たいビンタは覚えています。そういう厳しい側面を含めて、あのときの白陵で過ごした6年間で自分の人格が形成されたと思っていますので、感謝しています。

選挙区に高砂市があるということもあり、駅などで街頭演説することもあるのですが、最近の白陵生は青白い顔のもやしっぽい子が多いように思います（笑）。真面目で素直そうな子が多くなってきたということですかね。

卒業後に感じた白陵

石井　次に卒業後に感じた白陵の良さ、また白陵の3年間ないし6年間で、どのようなことが身に付いたのかお聞かせください。私は卒業して27年経ちますが、当時お世話になった三木一正理事長はじめ、恩師の先生や事務員の方々が、今

なお現役で活躍されおり、母校を訪れるたびに、そのお顔を見ることができるとホッとしますし、また励ましをいただけることに私学ならではの良さを感じています。

県の方の関係で言えば、兵庫県庁には県庁白陵会があり、縦、横のつながりで大変心強いものを感じています。本当に白陵で支えられているようなところがあるんですよね。

秋野　では白陵で悪かった点から（笑）。制服で外出するという校則を守っていたために、未だに服のセンスが悪い（笑）。卒業して25年経つのに今でも自分で私服を選べない。大学生のころもフォーマルに近い服装になるし、ずっと普段着も選べないので、自分で私服を買ったことがないという、まだ白陵生です（笑）。

良かった点はですね、買い食いダメという校則。未だに守っていて、歩きながら食べられない。その良さを実はアメリカに住んでいたときに思い知らされたんです。ジュースを飲むにしてもすべて飲み終えてから出て行く私に、「どうして」と同僚達が聞いてきました。「高校で訓練を受けた」と言うと「最高の教育だ」と言われました。「アメリカ人は路上で歩きながらタバコを吸わない。それは、最低のエチケットだ。そんな中での食べ歩きを許さない教育というのは最高の教育だ」ということらしいです。確かにじっと見てみると歩きタバコしているのはアジア人が多かったようですね。節度ある規律正しさは癖や習慣みたいなものなので、あとから演じられるものではないですから、そういう意味では厳しい環境においてもらったというのはよかったと思っています。

稲富　秋野先輩の話の続きになりますけれど、良いところは、誰かの部屋を訪問する時に「コンコン。失礼します」と自然にノックと挨拶をする習慣が身についていたことです。これ白陵では当たり前ですけれど、意外とできない人が多いですよね。

悪かったことは、男子が多い中で中学、高校を過ごしたから、女子と話すとき、何を話していいかわからない点ですね。ずっと引きずっているかもしれません（笑）。

岡田　大学になってトレンディドラマとかを見ると、別世界で羨ましく思うことはありましたよね。

あと、いい点ですが、成績の張り出しがあったこと。賛否両論あるとは思っているのですが、いい面は無視できない程大きいと思っています。例えば、大学に行ってから、また、社会に出てから何をするか考える際に、自分の中に過信でも自惚れでもいいから、自信が持てないと新しいことに対して何事もできないじゃないですか。白陵の6年間で常に数字で評価され続ける中で、「こつこつ努力を積み重ねれば、それなりに結果が出る」ということ繰り返し体験する。それは小さい自信を少しずつ溜めこんでいくということとなり、未知の世界に入ったときでも、自分の足で自立して歩いていけることにつながる。私自身、失敗してもなんとかすれば追いつけるという自分を作ってもらえたと思っています。学生時代にそういう成功体験を積み上げられるのがいいところですね。

これからの母校に望むこと

石井　次にこれからの母校に望むことをお聞かせください。

秋野　やはり、園長先生の講演が今でも忘れられません。あのエネルギーは受け継がれていくべきではないかと思うのですが。ケッパンは困りますが（笑）、

創立者の精神は受け継いでいってほしいと思います。

石井　園長には体からみなぎるオーラがあったね。

岡田　魂を震わせる話。政治家にも必要ですよね。

石井　今の先生にもそのDNAはしっかり受け継がれているからこそ、私たちが卒業したころ以上の成績を築いていっているということでしょうね。

秋野　創立者の言葉を残して欲しいですね。自分たちの原点ですからね。「園長の精神、魂に触れられるなら、子供を学校に入れたい」と思うのではないでしょうか。

岡田　自分の学生時代の反省点から母校に望むことは、なぜその大学に入るのか、何したいのかなど考える時間を作ってもらいたいですね。学生時代はただ選択肢が多そうだということで理系にいったことはそれでよかったですが、政治家になりたいと思っていたら、文系にいっていたかもしれません。そう思うと、卒業生の話などを聞く機会が今あるそうですが、いいことだと思います。

政治家を目指したわけ

石井　さて、いよいよ本題に入っていきます。皆さん若いとは言うものの政治の世界に入るまでにいろいろな経験をされてこられていますが、なぜ国会議員を目指されたのか、お聞かせください。

秋野　私は医師免許を使って、いろんな経験をさせていただきました。大学病院、地域医療、基礎研究、学生教育、海外勤務、厚労省という行政官から検疫官まで……と様々な経験をさせていただきましたが、出来ないこともありました。父の介護をした時に、越えられないものもあると思いました。その際にシステム作りの必要性を感じました。それが、動機ですね。しかし実態は白陵生ですから、言われたら「はい」と人事を断らずにいた結果でもありますが(笑)。でも、だからこそ、色んな経験をさせていただきました。

稲富　最初に政治を意識したのが中2のときで、同級生に川辺君というのがいて今、彼は毎日新聞の記者をやっているんですが、彼が、当時の中曽根総理大臣のデコを作ったんです。彼も寮生で、彼の影響が大きく、刺激を受けました。もちろん、当時は、野球選手がかっこいいというのと同じ感覚で、総理大臣かっこいいという程度から始まったのですが。さらに、在学中、福田赳夫元首相が講演に来られるというのも印象に残っています。(結局キャンセルで中山太郎氏が来られ、福田氏は翌年来られることとなる。)

やはり、そういった事も人は生まれてくる環境によって違う。けれどそれはおかしいと思っていた。努力でどうすることもできないスタート。それを、政治の力で何とかしたいと漠然と思っていましたね。

岡田　政治家を目指したのは20代のとき。目指していた人に声を掛けられたことがきっかけとなりました。未だに自分は本当に政治に向いているのか、試行錯誤し悩むことがあります。大学時代の恩師にそんな話をすると、「向いてないと思えるうちが役に立っているのでは」と言っていただいて、とりあえず真面目に自分のできることをやろうと思っています。今の政治について、何でこんな体たらくなのだと思います。やろうと思えば誰でも取り組めることが、なぜ調整できないのかと思うこともあり、自分でも役に立てることがあればと思って取り組んでいるところです。

日本の政治

石井　それぞれの立場で、今国政で頑張っておられる皆さんに「今の日本の政治について」お聞かせいただけたらと思います。

稲富　ここまで政局で動くことが優先されることに忸怩（じくじ）たる思いがあります。国家、国民のために動くべきところ、このままでいいのかと思います。

さりながら、日本の政治家が変わってきているとも思います。意欲ある人が増え、少なくとも20数年前より門戸が広がってきているように感じています。

岡田　私たちの置かれている現状はきびし過ぎると感じています。財政的にも厳しいところがあります。最低限のところ守らなければならないことを残しつつも、行き過ぎた社会保障とならぬようにすることが必要ですね。また、経済情勢自体が厳しい環境の中で、どう活路を見い出すかが問われており、大きな政治判断をする局面を作る必要があると思います。そういう点で、新しい感覚を持った人たちで突破口を見つけられればと思います。

秋野　政策の中身で勝負して、良い政策を立てられる政党が政権を担える仕組みが求められています。皆で膨らませていく作業が与野党問わず必要でしょうね。英知を結集して、現場の意見をもとにいいものを作らねばなりません。これからは、個別の政治家が名前で選ばれる時代となる必要があるでしょう。意欲のある人たちで力を合わせてこの国を良くしていかなくてはいけないと思います。

日本の未来

石井　では、「日本の未来にむけて」何か一言いただけませんか？

岡田　先ほども現状は厳しいと申し上げたが、同じ厳しい課題に直面していても、それをクリアするためには下を向いて歩くより、上を向いて希望を持って歩いていったほうが解決は早い。政治家は期待感、希望を持てるようなメッセージを出さなければならないという反省点もあります。これからの人たちには、「自分はこれでいいのだ」と思えるものを見つけることが必要だと思います。

稲富　私は「人」だと思います。個々がどう生きるか。次の世代をどうやって育て、上の世代をどうやって支えるか。日本の未来は「どう人作りをやっていくか」ということに尽きると思います。日本は暗い話が多いのですが、そうは言っても、世界を見てみると、日本は恵まれています。多くの国よりはるかにすばらしい要素を持っています。足元をもう一回世界標準から見て、いかに我々がすばらしい土台に立って生活し勉強しているかを改めて見直す中で、明るい未来を見据えていきたいなと思っています。

秋野　私も「人」だと思います。私は社会に出てからのいろんな変遷の中で目標を見つけました。中学・高校時代に頭の中で描いていたとおりにはなかなかいかないもので、いくら目標に向けて勉強して努力したとしても、必ずしも思い通りにならないこともあります。また着々と基礎を築き上げていくことでしか応用力はつかないと思います。原点をしっかり築き上げることが非常に重要だと思います。恵まれた国だと思いますので、あまり世界の動向に右往左往せずに、着実に力をつけていけば、必ずチャンスはめぐってくると思います。

そして、それをみんな信じていける、そんな未来があればと思います。

後輩へのメッセージ

石井　それでは、最後に、これからの日本を背負っていく未来の白陵生に向けてメッセージがあればお願いします。

秋野　中学・高校は訓練の時期だと思います。挨拶とか礼儀というのは癖や習慣だと思います。そのときには「どうしてこういうことをするのか」と思うこともあるでしょうが、なぜ役に立つのか後になってみないと分からないこともたくさんあります。ですから、白陵の先生方を信じて、勉強にクラブに、様々なことに頑張ってください。

稲富　私は夢を持って欲しいなと思いますね。今、私は国会議員をやっていますが、ここまで大きな負託をいただいて、ふと、まだ信じられないときがあります。だけど、やはりこういうことをしたい、こういう道にいきたいと思うことがまず第一歩となります。どうしても、学校という小さい世界から、世界のことを思えとか将来を考えろとか言われても思いつきもしないでしょうけど、小さなことでいいから、もちろんなかなか上手くいかないことも多くあるのですが、将来に夢を持ってもらいたいですね。

岡田　今になって、親にも経済的負担をかけていたんだなと思います。ですから、親に対する感謝の心を忘れないでほしい。それにどうやって応えていくかというと、一人ひとりが目標を見つけて頑張る姿を見せる事しかないのではと思います。それから、知識を得るだけの受け身でなく、自分がどうするか考えて欲しい。学校にもそういう機会を増やしてほしいです。留学して衝撃的だったのが、日本の学生ほど大卒で使い物にならない者はないと言われる事です。

知識量は多いけれど、すごく子ども。海外の学生は違っていて、学生のうちから様々な機会を通して社会の状況を見て、社会に出る準備が出来ている。自分のやりたいことを見つけていて、すごく大人だと言われる。日本の学生も、知識を自分のものとし、それを基にして自分の考えを持たなくてはいけない。それをトレーニングするのが学生時代だと思います。大学のときはやりたいことが何でもできるとき。後悔する学生生活でなく、自分のやりたいことを持ちながら過してほしいと思います。

閉 会

石井　どうもありがとうございました。

大変有意義な時間が持てたのではないかと思います。

今、国も地方も大変な時代を迎えておりますが、それぞれの立場と若い感性でこの国をリードしていっていただけたらと思っておりますし、皆さんなら必ずその役割を果たしていっていただけるものと、この座談会を通して確信いたしました。

本日は国会開会中の大変お忙しい中お集まりいただき、誠にありがとうございました。

参議院

衆議院

（この座談会は、平成24年3月17日に実施しました。）

卒業生
座談会
第３部

高きをめざす
「蛮カラ」編

遠山　寛 氏
1期生　ソフトテニス部
赤穂郡上郡町在住
㈱家具の遠山社長

秋本 隆夫 氏
5期生　野球部
姫路市白浜町在住
前公立中学校校長

上田 喜裕 氏
6期生　柔道部
姫路市飾磨区在住
ホンダ上田販売㈱社長

山本 亮三 氏
9期生　サッカー部
神戸市須磨区在住
兵庫県会計管理者

岡野 清和 氏
17期生　野球部
三木市本町在住
白陵高校英語科教員

北村 耕一郎 氏
25期生　サッカー部
神戸市垂水区在住
神港通運㈱社長

中村 亮太 氏
35期生　吹奏楽部
加古川市加古川町在住
加古川市議会議員

山田 祥五 氏
44期生　将棋部
姫路市白浜町在住
京都大学理学部4年

※参加者名は卒業期順に座談会当日現在で紹介しています。

秋本（進行役） テーマは「蛮カラ」ということで、どういう展開になるか分かりませんが、よろしくお願いします。

在学中、もっとも印象深い思い出

遠山 私達田舎の学校から入った者が一番びっくりしたのが90分授業ですね。それから園長先生の講義が英語の原書講読だったことですね。私達田舎の学校出身で、英語の力のないところで毎週原書を講読するという厳しい教育をしてもらった。わからないままに一生懸命やったものです。それと、高校時代の園長のドイツ語の授業のおかげで、大学ではほとんど勉強しなくても、単位を取りにくいことで有名なドイツ語の先生の単位をとることができました（笑）。

上田 私が中1の時に、全学年が初めてそろったんです。印象に残っているのは、中1の2学期に寮ができたことで、私も入寮しました。遠山さんも高3で入寮された。おじさんばっかりという印象でした（笑）。

園長のインパクトが強いというのは皆さんと同じですが、他に先生として印象に残っているのは、教頭の川戸先生、藤田家将先生です。今でも夢に出てくるくらいです（笑）。

川戸先生は寮で生活も一緒でした。卒業してから聞くとフランクな方だったらしいですが、寮では本当に厳しかった。園長とは違った厳しさで、勤勉、礼儀正しく、聖人君子とはこのような方のことを言うのだと思いました。

担任の先生は赤松先生で寮や学校で一緒でした。

柔道部は学校以上に厳しかった。藤田先生は「己に優しく、生徒には厳しく」を地で行く人でしたからね（笑）。

園長は「おやじ」の代わりという感じで、逆らう必要もないし逆らうことも出来ない（笑）。

6期生というのは東大に初めて入った学年です。補習はありましたが、園長の授業は直接受けてないんです。だから、あんまり叩かれたという印象はないんです。人が叩かれているのはよく見ましたがね（笑）。

山本 高校から入ると、まず、入学式前に園長の広畑の家で補習があるんです。広畑に行って英語の勉強をするんですが、一緒に勉強するのが中2の生徒とでした。ところが中2の方がよく知っていることがあるので、その現実に叩きのめされました（笑）。夏季補習が終わった後、また園長の家に補習に行くことがありました。この年は夏休みがほとんどなかった。ここまで勉強しないといけないのかと思いました。

岡野 そもそも私立中学校を受験する気はなかったのですが、ある日突然親が言い出しました。地元の中学の丸坊主が嫌で（白陵が丸坊主と知らず）、また、白陵という名前は野球が強そうに思えたので、親にまんまとのせられて受けたという感じです。当時の親は「学校に息子に根性を叩き込んでもらう」というようなところがあって、学校が神様という感じでした。

中3のとき、屋根に落ちた黒板消しを先生に取ってくれと頼まれ、2階から屋根に飛び降りたら、屋根を突き破って1階まで落ちて足の骨を折り、2週間入院したということがありました。その時でも親はその先生のことを一切悪く言わなかったんです。けど、それで逆に中学生

の私は救われた気がしました。それに、事件以来、「岡野は先生が飛び降りろ言うたら飛び降りるええやつや」と園長にかわいがってもらいました。何が幸いするかわからないものです（笑）。

秋本　5期生というのは公立併願受験の最後の年。私も公立を落ちて入学したのですが、えらいところに来たと思いましたね。210人いた入学生が卒業時には160人。3年でよく卒業できたなと思います。授業中下を向いていたら当たる。部活で怪我をして英語の予習ができなかったと言おうものなら、90分間その場で辞書を引きながら訳させられますしね。単語のテストもあるので、電車の中で必死に勉強しました。電車に乗り遅れると園長が校門で立っていてアウトと言って、授業を受けさせてもらえないのでとにかく必死でした。

けど、園長は厳しいけど優しい。その子のためを思って怒られていた。「お前ら、やったら出来るんや。姫路西高校、姫路東高校に負けるな。追い抜かせ。絶対に国立に行け」と発破をかけられたものです。

北村　藤田家将先生が怖かったですね。あのペタペタという独特の足音が響くと、皆静まり返ったものです。大学卒業ぐらいまで、その足音が夢に出てきていました（笑）。この先生には絶対逆らったらあかんと思ったエピソードが二つばかりあります。ある時、喫茶室にクマバチが迷い込んできた時、たまたま藤田先生が入って来られて、そのクマバチを手で潰して、「蜂は怖くない」と言って去っていかれました。ま

た、やんちゃな友人が校則違反の太いズボンをはいてきたとき、藤田先生と遭遇。当然叱られ、ビンタを受ける。私の目の前で180cmあったその友人が吹っ飛んだこともありました。あれを見て、この先生に逆らったらあかんと思いましたね（笑）。

私も岡野先生と同じで、親にだまされて、坊主が嫌で白陵を受験しました（笑）。それで入ったら、坊主にするだけでは済まず、いきなり入校時訓練というのがあって、藤田先生や石井先生の厳しい愛のムチが炸裂していました。

中村　僕が在学していた頃は白陵がいろいろ変わった時期だと思います。下の学年から制服が学ランからブレザーに変更されました。僕の学年は初めてロンドンに修学旅行に行きました。それから、高2のとき39期生に初めて女子が入学。ブラスバンド部にも中学女子が入ってきて、男子と違い、なかなか言うことをきかなくて苦労しました。

変わっていないのが机椅子。椅子の下の板が取れやすく、その板で尻をたたかれたこともあります（笑）。

厳しいところは変わってないのかなと思います。

山田　親から厳しいと聞かされていたけれど、僕たちの在学中は厳しいとは感じませんでした。ただ、他の学校の生徒の話を聞くとやはり

攻め一辺倒から負けない将棋へ

悲願の全国制覇

■白陵高3年・山田君

高砂市の白陵高校3年、山田祥五君(18)＝姫路市白浜町＝が、8月に前橋市で開かれた「全国高等学校将棋選手権大会」の男子個人戦で優勝した。山田君は同校将棋部に所属。全国大会での優勝は、同校の全部活動でも初めて。山田君は「とても光栄なこと」と喜んでいる。（吉田敦史）

山田君は幼稚園児のころ、父に教わり、初めて駒を手にした。小学三年から棋センターで指導してきた加古川将棋センターに通って腕を磨き、小学六年で全国大会の「位」になるなど能を開花させた。

得意の戦法は「振り角」で攻めの将棋。加古川将棋センターで指導してきた井上慶太八段も「攻めに勢いがあり、終盤の寄せがしっかりしている」と評価する。

将棋の全国大会で優勝した山田祥五君＝高砂市阿弥陀町阿弥陀、白陵高校

しかし、攻め一辺倒の将棋は弱点でもあり、攻め方を誤ると格下の相手に負けることもあったという。中学高校ではこれまで全国大会に挑んだが、頂点には立てなかった。

今回は高校生活最後の大会。山田君は、「負けない将棋」を心がけ、攻めと守りのバランスに気を配ったという。

決勝では、プロ棋士を養成する「奨励会」から高校将棋に戻ってきた強敵と対戦。後れを取っていた終盤、会心の一手をきっかけに形勢を逆転させた。その勝負手は、大駒奪取をしていた三浦弘行八段をうならせたという。

卒業までは受験勉強に専念するという山田君。「大学でも将棋部に入り、アマチュアの全国大会に優勝したい」と抱負を語った。

厳しいのかなとは思いましたが。将棋部では宇津木先生にサポートしてもらい、数学では長浜先生に教えてもらい、地域論文では大内先生に細かいところまで指導してもらい、先生方には大変お世話になりました。白陵の先生は親身になって世話してくださるのでありがたかったです。

卒業後に感じた白陵の良さ、身についたこと

山田　アルバイトで個別指導をやっていまして、いろんな生徒を見る機会があるのですが、比較すると白陵の良さが分かります。白陵生は5分前集合が当たり前にでき、節度があります。60分授業を受けきれない子たちがいる中で、白陵生は集中力もあります。厳しくしてもらったことで身に付いたと思います。また、柔道大会や運動会などで熱心だったのもいいと思います。運動会では行進の練習ばっかりした印象ですが、そういうことが今の白陵を作っていると思います。

中村　6年間の学校生活で今も付き合う友人ができたことがよかったですね。

節度が身に付くのもいいですね。悪いことをしていると叱ってもらえる。例えば、柔道大会は選手じゃなくても見なくてはならない。当時、選手じゃないので抜け出したことがあったのですが、中村先生に叱られた思い出があります。そんなふうにやったらいけないことをきちんと叱ってもらえるのはいいことだと思います。

ブラスバンド部では白陵祭という晴れ舞台がありました。夏休みに出てきて練習したことが思い出深いです。高校野球が80回大会のとき、一回戦が甲子園で行われ、ブラバンも応援に行きました。そのとき、勝って白陵の校歌が甲子園に流れたのはいい思い出です。

北村　一番多感な時期を一緒に過した（悪いことをして怒られたことも含めて）仲間は一生の友ですね。社会に出てからできた関係とはまた違うものがあります。私も5分前の精神は身に付いていて、社会に出てからも役に立っています。今日も2時集合なのに1時過ぎに学校に着いてしまいました（笑）。

上田　柔道部の練習しか印象に残っていないですね（笑）。卒業時、優秀な学年と言われましたが、入学時、中1で65名いたのが高3の時22名。結局は優秀なものがいなくなっただけで大変でした（笑）。

寮の生活が快適でした。ホームシックは全くなかったです。実家が黒坂さん（1期生）と同じ隣保なので、同窓会を立ち上げるとき呼ばれました。それから副会長を35年務めています。

卒業後に感じた白陵のよさというのは、卒業生が増えるにつれて白陵が有名になっているということをひしひしと感じるということですね。

今度6期生は還暦の同窓会をやります。同窓会で再会すると、すごい会社のすごいポストについている者もいます。10人以上おるんです。会うのが楽しみですね。

山本　サッカー部でしたが、まじめにしたけどうまくならなかったですね（笑）。一緒にやったメンバーは今も付き合いがあります。顧問の豊田先生は何を指導するというわけでもないが、影響力を持つという恐ろしい指導者でした（笑）。面倒見のいい先生でしたね。

印象に残っていることは、創立10周年の際にあった田中美知太郎氏や広中平祐氏の講演会です。当時は話の内容が何も分からないまま聞いていたけれど、「質の高い学問に触れた」「聞いた」という経験こそが大事なのだと思います。園長の高みを目指す志を感じましたね。

岡野　園長の宿題が毎回大変だったのですが、部活で疲れて帰った後寝てしまって、宿題が出来ずに朝を迎えることがよくありました。そんな時になんとかやりくりしてこなしていったのはすごくいい経験になりました。おかげで今もちょっとした空いた時間とかに要領よく仕事が出来ます（笑）。

これからの母校に望むこと

遠山　久しぶりに生徒に会って思うのは、昔はもう少し挨拶をしていたのにということ。今日はすれちがっても無言で通り過ぎていく生徒がほとんどで、本当に変わったなと思います。昔は帽子をとって挨拶していましたが、その習慣を残して欲しいですね。

岡野　挨拶は学生帽がなくなった頃から悪くなったと言われるようになったように思います。昔は帽子をとるだけで挨拶になっていましたが、今は大きな声で「こんにちは」と言う、実質の挨拶をさせないといけないと思っています。

先日も新入生に入校時訓練で挨拶の話をしました。卒業してどんどん社会に進出していく中で、やはり挨拶がきちんとできる大人になってほしいということを伝えましたが、挨拶だけではなく、先輩が残してくれた伝統にありがたみを感じて行動できる人間になって欲しいですね。

先輩と言うのは本当にありがたい存在です。社会に出て、なにかのきっかけでお互いが白陵出身だとわかった時に、高校時代をこの白陵という特別な空間ですごしたという経験を共有したというだけで、特別に親密に付き合ってもらえたりしますからね。

上田　学校に何を望むかと言われれば、柔道部OBとしては柔道場を改修してほしいですね（笑）。

それから、もうちょっと同窓会の方を向いて欲しいと思います。東京白陵会の勢いがすごいのは、東京で一旗上げようと出てきた者が、ネットワークがない、情報がない中でそれらを作り、必死に得ようとしているからです。

今後の同窓会の在り方というのを考えていかないといけないなと思っています。

北村　私の頃は中学は男子校で、高校から女子が十数名入るという感じでした。当時は、はっきりと生徒手帳に書かれていた通り男女交際禁止でしたが、今日来るときに4組も男女で帰っていたのを見て驚きました（笑）。けど、女子が増えて、男子も爽やかな感じに見えます。ただ、車が来ても道の脇に寄らない子もいる。昔はもっと緊張感を持って登下校していたものです。時代が変わったと感じます。

中村　年に2、3回部活がらみで学校に来ることがあるのですが、ブラスバンド部のステージを見ても女子の割合が増え、全体の人数も増えています。演奏も迫力があります。

これからもますます文武両道の学校になってほしいと思います。

山田　先生の生徒に対する真摯な態度がいいです。先生にしつけもしてもらってよかったと思います。やはり白陵だと改めて思います。

秋本　子どもも白陵に入ったのですが、今日この座談会があると伝えたら、子どもが、白陵に行ってよかったと言っていたと伝えてほしいと言っていました。

次男は姫路西高校に行ったのですが、比べると違いが分かります。OB、同窓会の組織と年齢層が違う。やはり、50年の歴史はまだ短いです。それから姫路西と白陵の違いは、西校は地元にいる者が多く、白陵は県外へ出て行く者が多いことです。最近は地元に戻ってきている者も増えてきているようですが、地元にいる者がネットワークを作ることが必要です。

教員に望むことは

遠山　ドイツ語を教えたり、原書購読させたりしたあの園長の情熱ですね。子どもに垣根を作らず、その子の良さを引き出す教育ができないかなと思います。白陵から特異な才能を持った子が出てきた

らいいですね。

上田　寂しいと思うのは、寮生の人数の少なさですね。通学時間も短く、勉強にも部活するにもいい環境です。園長の肝いりで出来た寮なので、活かして欲しいなあ。今振り返ると寮監の先生も大変だったと思いますが、あの体験は貴重です。寮は園長の考え方を反映したものだと思います。出来た当時は園長の両親が週に1回くらい寮で一緒に食事されていました。寮食をチェックされていたのでしょうね。3年くらい続いたかな。とにかく寮の思い出が強かったので、ぜひ寮の文化を残していってほしいです。

山本　「勉強は人生の可能性を広げるため」ということを子どもたちに分からせてほしいです。これは白陵に限らないことかな。

　それと、残念なのは、園長と吉田先生が在職中に亡くなられたことです。くれぐれも先生方には健康に気をつけていただきたいです。

北村　大学に入り、独り暮らしをし、自由になると、逃げ出したかった6年間は、実は守られていたということに気付きました。

　人間形成期に怖い人がいるというのは大事なことだと思います。今、うちの管理職が若い子に怒れない。また若い子も怒られるとむくれたり辞めたりする。それが希薄感を生むんです。やはり、スパルタでもいいと思います。こんな世の中になってくると、怒られること、理不尽なことがあることを学べたことは良かったと思います。

中村　勉強したが、大学合格がゴールとなって、ちゃらんぽらんになる卒業生もいると聞きます。高校のときから外の世界を知ってほしいなと思います。活躍されているすばらしい先輩がいることを知ってもらう機会があればいいですね。

山田　受験のための勉強をメインにやっているような気がします。先を見越した勉強をすると将来が広がると思います。

秋本　公立から考えると、すばらしい校舎・環境です。そこで仕事をするのは幸せだと思います。ビシビシと生徒を鍛えてもらいたい。東大、京大に入る子も増えていますが、行けない子もいると思います。われわれの世代は無名の大学に行った者も多いですが、社会に出て、立派な地位についている者も多いです。それは、出た大学ではなく、様々な困難を乗り越えていける力を持っていたからで、その力を持っていたのが白陵生だったのです。だからバイタリティーを持った生徒を育てて欲しいです。バイタリティーを持った上で優秀であれば、当然日本を引っ張っていける者も出てくるでしょう。

　また、こんな先輩がいるということがわかれば目標もできるでしょう。白陵だとわかると親近感も出て、まとまっていく。それが白陵です。

遠山　園長の「生きた証を残す」という言葉があります。ぜひ、子どもたちがそのような生き方ができるよう導いてもらいたいですね。

秋本（進行役）　皆さん、まだまだ話し足りないと思いますが、そろそろ時間も参りましたのでこのあたりで終わりたいと思います。本日は大変お忙しい中、快くご参加くださいまして大変ありがとうございました。これからも母校のためによろしくお願いいたします。

この座談会は平成24年5月12日に
本校会議室にて実施しました。

FILE. 1

後輩に望むこと　　生田　和良

略歴　4期生。61才。神戸大学農学部卒。その後神戸大理学研究科、大阪大医学博士課程卒業。ルイジアナ州立大学を経、大阪大微生物研究所助手、助教授。平成元年北海道大免疫研究所教授に、平成10年から大阪大微生物病研究所教授。

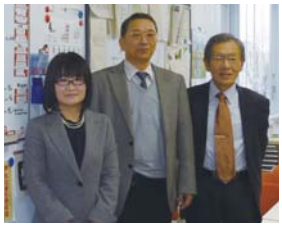
在学中の思い出と言えば？

園長の存在感がすごくある学校だった。私は4期生の高校入学組だったので、ほとんど授業は受けていないが、皆が園長の話ばかりしているという感じだった。若い先生は園長を怖がっているし、神様のようにとらえているし、それに園長は女子でも宿題してこないと頬を張ったりするし…、すごい先生だと思っていた。1、2期生はシンボル化しているのがよく分かった。

スパルタ教育だった白陵での唯一の楽しみは、ブラスバンド部の活動だった。黒田さん（現、白陵教員）が熱心に取り組んでいたのが印象深い。憧れはトランペットだったが、私の担当はホルン。昔は放課後体育館横で練習していたが、時々藤田家将先生のカミナリが落ちた。あの先生も怖かったなあ。私もそうなのだが、当時はまだ公立高校の受験に失敗して入学してきた生徒も多かった。できのいいのが来ていないのに、授業は気取って英語の原書を読んだりしている。入ってすぐのころは、「本当に白陵で大丈夫かな？」と実は思っていた。それが今では白陵の卒業生が活躍し、白陵の知名度も上がってきている。今の時代、私学の中高一貫校でないと自由に教育できないという難しさがある。白陵は時代の先取りで成功した一例だといえる。

白陵で身についたことは？

勉強や学歴は関係ないということ。既に公立高校受験で挫折を覚え、白陵に入学した私に、最後まで諦めない粘り強さを身につけさせてくれたのは白陵だったと言える。人間、勉強だけでは駄目だ。順風満帆にことが運んでいたら、今の自分はなかったかもしれない。阪大医学研究科博士課程でウイルス研究に携わったとき、周囲は皆医学部出身ばかりで理学部は私だけ。周囲がさほど研究熱心でない中で、がむしゃらに働いた。また、臨床医になった彼らから様々な研究材料を手に入れる機会にも恵まれた。医者じゃないから皆が油断する。異端児だったからいろいろできた。そこでの経験で、論文を書く技術に英語力、研究費の申請の仕方から認可にこぎつける術に至るまで、今必要な様々なことを身に付けることができた。その研究姿勢、働きが教授に認められたのか、学会や会議によく同伴させてもらった。雑草のような粘り強い取り組みで、逆転することができ、そして今がある。



後輩に望むことは？

何事も最後まで諦めないこと。諦めなければ何とかなるものだ。それに、努力していると誰かが見てくれているものだ。私自身、実力より運がよかったと思うが、諦めなかった結果だ。諦めなければ運を掴み取ることができる。そして、実力が均衡しているとき、最後は人格者かどうかが重要になってくる。つまり、自分で考え、判断し、自分の責任のもとで行動できる人間、広い視野を持ち、失敗を恐れずがむしゃらに突き進むことができる人間。そういう人間が最後は生き残ってくる。

これからの母校への提言

これからは大学を卒業した後、力が伸びる生徒を育てて欲しい。「東大に何人合格した」でなく「こんな人材が育った」と誇れるようなことが必要。また、国際人を育てることが重視されている。現在、私はタイに研究室を創設し、ウイルス感染症の治療薬の開発などにも携わっている。その関連で日本の企業と一緒に仕事をすることがある。その際に思うことだが、日本の企業は目先の利益ばかりを追い、ヨーロッパから大きく遅れをとっているということだ。世界の様々な国々との柔軟な対応を視野に入れていかなければ、世界では生き残っていけない。これからは、高校から世界に目を向け、優秀な人材を発掘するようなことが必要となってくるだろう。白陵でも外国人枠を作って、優秀な人材を獲得していくことが必要となるかもしれない。様々な価値観、考え方に触れ、理解し、認め合うような場を早いうちから持つことが大事だ。何事も「先手必勝」である。

FILE. 2

勝負の世界　南　信男

略歴　8期生　57才。慶応義塾大学卒。昭和52年阪神電気鉄道㈱に入社し、主にレジャー部門（甲子園球場や阪神球団）に勤務。平成16年7月に阪神タイガース球団の常務、その後専務を経て、平成19年から社長に就任。

白陵時代はどうでしたか？

私と同じ小学校の友達6人はそれぞれの親に勧められ、分からないまま入学してしまい、大変な学校に入ったと後悔した。

当時の白陵は厳しい校則に加え、園長のスパルタ授業（園長のきつい補習と過酷な原書、ドイツ語までやらされた）という「地獄」のような日々が続いた結果、入学時3クラスあったのが、中3では2クラスにまで減ってしまった。

或る日、「対園長シフト」を組みグループで分担して予習し、それをつないで授業に臨んだ。しかし、英訳を妙につなげば変な訳になってしまう。そんなときはグループの誰かが園長の逆鱗に触れ、餌食になるのだが、結束力の強い我々は知らない顔をしてじっと耐えた（A君、ごめん、許せ、悪かった）。髪の毛が長い（当時は丸坊主）と園長にバリカンを入れられる。それも頭のセンターだけを少し（かなり短く？）刈られる（侍の頭を連想してもらいたい）ので、仕方なく散髪屋に行かなければならない。別に辛くはなかったが、散髪屋のおじさんに「何故こんな頭になっとん」と聞かれるのが恥ずかしかった。

高校になると、サッカー部のキャプテンも務め、自身としてはそれなりに充実していたと思う。悪さをしたこともあったが、人からは「要領がええなあ」とよく言われた。

大学は「東京へ行きたい」の一点で、早慶を目指した。慶応に合格し、ホッとしているとき、園長から「国公立も受けろ」と言われ、出願はしたが受けに行かなかった。それが園長にばれ、「卒業証書はやらない」と逆鱗に触れたときには、「えらいことになった、おれの要領のよさも地に落ちた」と嘆いたものだった。しかし、園長からは叱られたけれど、笑顔で送り出してもらったとき、最後の最後に園長の「気持ち、信念、優しさ」に気がついた気がした。園長とそれにA君にも感謝しています。

白陵で学んだことと言えば？

現在の立場・仕事についてからも、よく周りの人から「図太いなぁ」と言われる。マスコミのバッシングはじめ、勝負の世界なので、色々と胃の痛むことが多い仕事だが、プレッシャーにつぶれたりするわけにはいかない。会社に入ってから、現在の職につくまで色々とステップを踏んで、経験をさせてもらったことが大きいと思う。

また、生来の性格的なものもあるだろうが、振り返ってみて、白陵で6年間学んだこと（鍛えられたというべきか）が「図太さ」や「我慢」といった人格の形成にも、私の場合、いい方に役立ったかと思う。

最後に、シーズンが始まると「勝った、負けたの」日々が続く。特に、負けたときの翌朝は体のバランスも崩れ気分も晴れないが、「次へ」という気持ちが持てるかどうかが、園長の碑文にあるように「人間が生きている証」だと思う。それを失うか希薄になったとき、タイガースから身を引くことが私の責務だと思う。一言で言って、白陵・園長から学んだものは「人間力」と言えるのではないか。

FILE.3

姫路から烽火を　　飯島　義雄

略歴　13期生。52才。東京大学卒。昭和58年自治省へ入省、島根県浜田税務署署長、愛媛県市町村課長、豪州・中国・中東での海外勤務の後、福井県総務部長を経て、平成17年福井県副知事に。総務省消防庁防災課長・自治財政局財務調査課長を経て、平成23年7月より姫路市副市長。

在学中の最も印象深い思い出

食堂の「中華そば」がありますよね。おなかのすく年頃でしたので、あの赤いとんがり屋根の食堂で「中華そば」を食べるのが楽しみでした。うどんとそばとみんな同じつゆで、麺とチャーシューが載っているだけなんですが、あの時食べたものは今食べるどんな美食よりもおいしく思いますよね。

食欲と同様に、旺盛な知識欲というモノが若い時にはありますよね。白陵はそんな知識欲に応えてくれるんじゃないかなと思います。今年の「ダイヤモンド」では入った時よりも出るときの学力がはるかに高くなると書いてありましたよね。

園長先生の思い出

まず小テストの恐怖は忘れられないです。OBの間で盛り上がる話題です。今、私は安全圏にいるので、このように言えるのでしょうが。私は気持ちが合理的でして、T.ハーディとか戦前の教科書の単語TANK等を馬鹿にしていたところがあり、手を抜いてよく叩かれました。高校2年・3年では、さすがに焦りました。受験の効率では最悪だったと思いましたね。何でこんなことをさせられるんだと辟易しました。中学でもドイツ語も勉強させられましたし。ただ大学に入った時、ドイツ語クラスに入って少し楽だったというメリットはありましたが、さすがに受験をドイツ語でする勇気はありませんでした。

園長先生は教養を身につけろとおっしゃいました。今は安易に流れがちで、それに警鐘を鳴らしておられたんでしょう。今のような厳しい時代には本当は我慢しないといけないんです。そういう時にやはり我慢して勉強する訓練を身に付けた白陵生はこれからの世の中の役に立っていくでしょうね。

園長先生は32歳で学園を創設し、52歳で急逝された。その52歳に自分がなった今、岐路に立つといつも「園長先生ならどうされるかな、どういわれるかな」と考えますね。「生きていたことの証しを残して生涯を終りたい」なと思います。

卒業後に感じた「白陵」の良さ

スポンジのように何もかも吸収できたのはあの時代だったからだと思いますね。欲望を我慢して教養や知識を身につけようとする本校の方針は間違っていない。自らを律する力を養えたのは一生の資産です。今義務を果たさず権利を要求するだけの人が増えてきたが、その中で自らを律する力を養ってきたことは大切なことです。

「白陵」での学校生活の思い出

走ることだけは好きでした、特に長距離が。まだ若い欅の木の間を走るのが好きでした。高二のマラソン大会で2番になったのは嬉しかった。あの頃は新在家の自宅から学校まで自転車で約30分かけて通学していました。

今の仕事についての抱負

地方分権が進む中、一番住民に身近な「市」が、今後最も重要な役割を担うようになっていきます。姫路市役所は地方自治の最前線として、やりがいのある職場です。

姫路を中心とする播磨は、明治の初めには全国税収トップ3の「飾磨県」という非常に豊かな地域でしたが、明治9年に神戸港の発展のために飾磨県は兵庫県に統合されてしまいます。私は仕事を通じて、播磨の豊かさと存在感を再び、全国に発信していきたいと思います。

これまでの地方自治の経験を活かし、姫路市の政策レベルを高めて、人口減少・超高齢社会の中でも、播磨が光り輝く地域になるよう、市職員とともに取り組みます。幸い市職員は優秀で、その中に多くの白陵卒業生も頑張っています。

これからの時代における「白陵」の意義

約50年後の2060年には、日本の人口は3割減8674万人となり、高齢者比率は今の倍の4割となります。これは人類の歴史が経験したことのない人口減少・超高齢です。この社会の縮小に対処し、戦略的に日本を発展させる必要があります。

変革期には人材育成が重要となります。姫路は幕末、和算など民間教育が全国トップレベルでした。これが明治維新以降の日本の発展に大きく寄与しました。

母校白陵も優れた人材の育成を通じて、これからの日本の未来に貢献していくと思います。

後輩の皆さんも、校歌の「未来にとどく烽火立つ」のように、自らを律する白陵の精神で、日本の未来を切り開いていただきたいと思います。

FILE. 4

不肖宮嶋の青春記　宮嶋　茂樹

略歴　15期生。50才。報道カメラマン。日本大学芸術学部卒。写真週刊誌「フライデー」専属カメラマンを経てフリーに。世界で起こっている紛争地を飛び回り、その戦場の写真や世界要人のスクープ写真が多い。TV局の出演依頼も多い。

在学中の印象深い出来事

園長の授業。6年間ずっと持っていただいた。あの6年間より怖いものは存在しない。だから世界中どこに行っても怖くない。イラク戦争より怖かった。今でも園長にどつかれる夢を見る。6年間思い続けたことはただ一つ。一日も早く卒業すること。

女の先生以外どの先生もどついていたのではないでしょうか。大内先生にも授業の初日に地図帳を忘れて8発たたいていただきました……。

北海道への高校の修学旅行、帰りのフェリーの中で園長の授業があった。重たい英和辞典を鞄に詰め、旅館では夜、皆予習をしていた。無事に帰るために。長濱先生がおっしゃった、「お前らも大変やな」と。

写真部に入り前川先生にいろいろ教わった。暗室が青春の思い出。写真で生きていきたいと思ったのが高1の頃。いよいよ受験になり日大の芸術学部に行きたいと切り出したが、父をはじめとして担任の高山先生、大内先生、誰もが趣味にしておけとのアドバイス。あげく園長に知られ、ああこれで受験もさせてもらえないやろと思ったが、園長は言われた、「おもしろいやんけ。行け行け」と。

卒業後に感じた白陵のすごさ

思春期に中1と同じ緊張感を持たせ続けた白陵（園長）は誰が何と言おうと偉大。また自然環境以上に、夏・冬の休みもないカリキュラムのすごさ。暗記中心とはいえ、確実に力をつけさせてくれた。休みもなく学校に行っていたので親は楽だったのでは。

教育者としてより経営者として生きている時の園長に聞きたかった。30代そこそこで学校を立ち上げる資金をよく貸してもらえたなということと、亡くなるまでのたった20年で進学校としての名声を確立し、岡山白陵を創立するなど学園を大きくした園長の生の声を。（今なら私は入学できなかった。）

これからの白陵に望むこと

人間の本音として「同じ苦労を味わわせたい」とも思うが、女子が多く校内の雰囲気も明るく、はるかに健全である。東京でも有名。本当にいい学校になったと思う。

制服、髪型はいかに変わろうと、園長が残した白陵の精神、伝統は世代を超えて脈々と受け継がれていく。この白陵という学び舎で学んだ精神を共有していくことで皆がつながっていく、それが白陵であると思う。また自然環境も32年前と変わっていなかった。これからも変わらないことを望んでいる。

大学への進学率もさることながら、文武両道で行ってほしい。そして私のように、音楽、芸術分野でも身を立てる猛者が出てきてもらいたい。生意気で無鉄砲はいい。それは若者の特権だから。ただ目標を決めたら、たとえ一人でも最後まで頑張ってほしい。他人と群れて自分を見失うことだけはするな。

現在の職業について

フリーの報道カメラマンで、現在も過去も全く同じことを飽きもせず続けている。芸術写真やファッション、広告写真より報道現場が中心。何よりも必要なのは健康と体力と好奇心で、芸術とは程遠い仕事。しかし、写真センスを磨かないと続けられない厳しい世界。特に新聞、出版社の社員カメラマンと違いフリーには。ただフリーは現場を選べる自由がある。事件、事故、災害、紛争現場で大きなカメラを持って走り回ったり、怒鳴りあったりしている人間を思い浮かべていただければよい。私の場合は長期間単独で外国や紛争地を取材することが圧倒的に多い。体力的にきつく50歳を境に辞めようかとも思ったが、東北の被災地で40日以上寝泊まりし考えが変わった。もう一度頑張ろうと。この先も現役の報道カメラマンとして。

FILE. 5

母校から学んだこと　桂　阿か枝

略歴　本名：岸本浩一。25期生。40才。岡山大学農学部卒。大学で落語研究会に所属。グンゼ㈱に入社。1年半後に退社し、平成8年上方落語四天王の一人桂文枝に入門。平成18年なにわ芸術祭奨励賞、平成21年には同じく新人賞を受賞。

高校時代の思い出

明石の公立中学から高校入試に合格し、大喜びで入学したものの、勉強の大変さを思い知りました。当時は、校則もきちんと守り、特に怒られることもない目立たない生徒でした。それに、部活動に参加したいという気もなく、学校行事にも積極的ではなく、きわめて消極的な高校時代だったように思います。そんな生徒でしたが、高2、高3と担任していただいた宮﨑先生は温かく見守ってくださいました。

柔道の時間には、藤田先生に「そこの青白いやつ！」と呼ばれ、背負い投げで投げられる役になりました。今でも前回り受身は（ない方がいいのだが）自信はありますよ。それから修学旅行で北海道に行ったのはすごい感動でした。一番印象に残っているのはじゃがいもの美味さだったというのは少し悲しいですが。

そのように何が楽しいわけでもない高校時代でしたが、なぜか辞めたいとか思ったことは全くなかったですね。

理系に進んだのも単に国語が苦手だったということからで、成績も108人中102番というひどいものでした。大学の選択も宮﨑先生にとにかく現役で合格できるところで、親元を離れて下宿できるところを探してほしいと頼みました。そして希望大学に現役で通してもらって本当に感謝しています。

卒業後に感じた白陵

山本先生の授業で、夏目漱石が講演者としても有能で、その講演が本になっていることを知りました。その『私の個人主義』という本は珍しくしっかり読みましたが、その時は漱石の意外な一面に興味をもっただけでした。落語家になるかどうか迷っていた時に、その本の中の「ああ、ここにおれの進むべき道があった！　ようやく掘り当てた！　こういう感投詞を心の底から呼び出される時、あなたがたは初めて心を安んずる事ができるのでしょう」という一節がなぜか思い出され、

落語の世界に飛び込む勇気がもてたんです。白陵であの授業を受けていなかったら、桂阿か枝は存在していなかったかもしれません。それから、弟子入りして6年目くらいのまだまだ駆け出しの時に落語会に宮﨑先生が見にきてくださいました。その後に丁寧に激励の手紙までいただいた時は感動しました。今もその手紙は宝物になっています。勉強オンリーのイメージのあった白陵でしたが、卒業してからその温かさを感じています。

後輩へ

3月には必ずサンデー毎日を買って大学入試成績を見ています。いつもよくがんばっているなぁと感心して眺めるのが年間行事になってます。卒業生としていつも陰ながら応援しています。

社会に出ればうまくいく時もあれば、いかない時もあります。たとえこけることがあっても、自分で立ち上がって再び歩き始められる人間になってほしいですね。

それから、今の仕事から日々感じることですが、自分で努力するのは当たり前ですが、周りの人に認められてなんぼということがあるので、そういう人たちの言葉に耳を傾ける謙虚さも持ってほしいです。

それに、自分もそうだったように、今特にしたいことが見つからなくても、どこかで必ず人生をかける仕事に出会えるチャンスがあると思うので、そのチャンスを逃さず掴む気持ちでいてほしいですね。

FILE. 6

白陵と民主主義　　熊谷　俊人

略歴 31期生。34才。早稲田大学政経学部卒。NTTコミュニケーションズ入社。「子どもと議会の架け橋」プロジェクトを立ち上げる。平成19年から千葉市議を一期を経て平成21年6月より第26代千葉市長。史上最年少の政令指定都市の市長。

――市長という仕事について教えて下さい

政治というと国会をイメージする人が多いが、私は市長がしたかった。自分の仕事に対する市民の反応がダイレクトにあり、非常にやり甲斐がある。地方分権が叫ばれるが、市長の様ないわば現場の人間がもっと活躍しなければならない。国は大き過ぎて一人で出来る事に限りがあるし、色々なしがらみもある。それに比べ市政なら、一生懸命頑張ればまだ変えて行ける。

――政治に対する指向性はいつ頃からですか

高校在学中から、新聞やテレビの討論番組は欠かさず見ていた。高2の1月に阪神・淡路大震災を体験したが、当時の貝原兵庫県知事や笹山神戸市長が復興の陣頭指揮するのを間近で見た。その頃から地方政治の事は頭の中に常にあったと思う。又、ある時東京の区議会を傍聴したが、期待したレベルではなかった。地方分権の時代と言いながら地方政治は発展途上だなと思った。そこで民主党の公募に応募して千葉市議になった。市議になると今度は市役所の問題点が目に付く様になり、丁度タイミング良く市長選に出る事が出来、現在の自分がある。今の政治は、税金の使い方一つ取っても若者に希望を抱かせない。必要な物は残し、不合理な所は改め、予算の見直しをしてきた。

――在学中の一番印象深い思い出は何ですか

入校時訓練です。一種カルチャーショックで、とんでもない処に来てしまったと思ったが、今振り返ると良かった。当時は微塵も思わなかったが（笑）。規律・行儀的なものを叩きこまれ、今政治活動する上で役立っている。白陵は田舎にあるのが良い。変にお坊ちゃん・お嬢ちゃん学校になって欲しくない。そんなものは世間に他にいくらでもある。在学中は毎日片道1時間半の通学で大変だったが、元々本好きなので、車内は言わば図書館状態で、好きな歴史小説を片っ端から読破し、その後の糧となるものを得る事が出来た。白陵に行っていなかったら今の自分はない。

――これからの母校に望む事はありますか

学ランでなくなったのは淋しい。私は白陵の硬派の旧制高校的な部分が好きで、だから大学も慶応でなく早稲田です。白陵も随分変わった様だが、古く変わらない部分を守り、今後も生徒が乗り越えるべき高いハードル的存在であって欲しい。生徒はそれを乗り越えようと日々もがく中で、現代社会を生き抜く逞しさ・したたかさを身に付けて欲しい。

――後輩にも政治の世界に身を投じて欲しいですか

ええ。まだ人材不足です。政治の世界ももっと競争率が上がり政治家の平均的な質が上がる必要がある。こういう仕事が尊敬されない社会はおかしい。政治に関心のある若者はまだまだ少ない。

――政治家熊谷は、海外のどの国にその理想を求めますか

英国になれたらなとは思う。日本では基本的に英国流の政党に対する信頼がない。だからブームで政党・政治家が選ばれがちである。日本で英国流の政党本位の政治が実現するかは疑問だ。その意味で議員内閣制は難しい。現代の日本では市長の方がやり甲斐がある。政治の成果は10年のスパンで見る必要があるが日本人は待てない。社会は何に対してもすぐ結果を求め過ぎる。もっと我慢強くならないといけない。表面だけでなく中身の教育が大切で、その意味で白陵の教育には頑張って欲しい。「独立不羈」は素晴らしい校是だと思う。短期的なうつろいに揺るがず自分をしっかり持つという意味で、今一番必要です。迎合しないことです。日本の民主主義成熟には白陵の教育が必要です。

Alma Mater 白陵
平成25年1月1日　第 32 号

平成23年度 収支決算報告書

平成23年4月1日～平成24年3月31日

単位／円

収入の部	予算額	決算額	差異
前年度繰越金	13,082,659	13,082,659	0
会費収入	2,775,000	2,850,000	△75,000
終身会費	2,775,000	2,850,000	△75,000
臨時会費	0	0	0
総会費	0	0	0
会費外収入	115,000	974,154	△859,154
名簿収入	10,000	7,600	2,400
広告収入	0	0	0
利息収入	5,000	6,554	△1,554
雑収入	0	0	0
寄付金	100,000	960,000	△860,000
総会積立金繰入収入	0	0	0
合計	15,972,659	16,906,813	△934,154

支出の部	予算額	決算額	差異
事務費支出	125,000	40,230	84,770
消耗品費	20,000	0	20,000
印刷費	20,000	0	20,000
通信費	50,000	27,710	22,290
支払手数料	30,000	12,520	17,480
雑費	5,000	0	5,000
会議費支出	550,000	419,236	130,764
理事会費	200,000	143,405	56,595
役員会費	300,000	275,831	24,169
委員会費	50,000	0	50,000
事業費支出	1,560,000	1,442,248	117,752
総会費	0	0	0
名簿発行費	0	0	0
会報発行費	850,000	835,585	14,415
ホームページ作成費	210,000	210,000	0
卒業記念品費	350,000	322,560	27,440
慶弔費	150,000	74,103	75,897
備品費支出	0	0	0
OB会活動助成金	180,000	180,000	0
渉外費支出	100,000	75,000	25,000
予備費支出	500,000	0	500,000
小計	3,015,000	2,156,714	858,286
総会積立金	200,000	200,000	0
次年度繰越金	12,757,659	14,550,099	△1,792,440
合計	15,972,659	16,906,813	△934,154

平成23年度 会務報告

年月日	内容	年月日	内容
23. 5. 24	理事会	23. 9.29	理事会
23. 6. 25	定例役員会	23.11.22	役員忘年会
23. 7. 2	東京白陵高校同窓会	23.12.11	三会合同正副会長会
23. 9. 1	会報第31号発行	24. 2.11	第47期生卒業式

第５回　東京白陵高校同窓会報告

５回目を迎えた東京白陵高校同窓会が、平成24年7月7日(土)品川プリンスホテルにおいて盛大に開催されました。今回は姉妹校である岡山白陵高校同窓会も合同参加を呼びかけたこともあり、参加人数は235名と過去最高となりました。この会の開催にあたっては、案内や準備に毎年東京白陵同窓会の幹事の方々が献身的なお世話をしてくださっておりますが、首都圏で活躍する白陵生の絆を深める感動的な会として今後も更なる発展が期待されております。

白陵会名簿発行予告

白陵会名簿は5年毎に発行しておりますが、次回は平成26年12月の発行となります。前回同様に名簿データ整備専門会社である株式会社サラト(本社姫路市)に編集から出版まで全てを委託することにしております。

詳細につきましては次回の会報でお知らせするとともに、平成26年3月頃に(株)サラトから調査カードを発送致しますので、ご協力下さいますようお願いします。

追悼　第４代校長　八木誠造先生

(昭和60年4月～平成10年3月)

平成23年12月逝去

第４代校長として、学校の発展に尽くされた八木誠造先生が、平成23年12月13日、85歳で逝去されました。八木先生は、兵庫県立明石西高等学校長を経て淡路教育事務所長を務められた後、創設者三木省吾先生急逝後2年を経た昭和60年4月、吉岡喬校長（故人）の後任として、請われて第４代校長に就任されました。爾来、平成10年3月までの13年間にわたり白陵激動変革期の校長職を果たされました。

先生は卒業生へ贈る言葉として、諸葛孔明・ルソー・上杉鷹山・ケネディー・キェルケゴール・道元・タゴールなど、毎年、歴史上の偉人を取り上げられ、最後は長年温めておられたカントの話で締めくくられました。また、在任中の平成7年1月17日に発生した阪神淡路大震災では、お住まいが神戸市東灘区であったためご自身も被災された中、毎日学校まで徒歩と神戸港からの船で通勤され被災した生徒の対応に当たられたことは信念の人であった先生の人柄を偲ぶエピソードとして語り継がれております。校長退任後も引き続き学園理事として平成23年3月までの白陵の発展に尽くされました。長年ご指導いただき有り難うございました。心よりご冥福をお祈り申しあげます。

編集後記

新年あけましておめでとうございます。

会報三十二号は学校創立五十周年記念特集号として二十八頁のカラー冊子にしました。

特集記事は、学校当局の許可を得て昨年十一月九日に発刊された『五十周年記念誌』の中から同窓会に関係の深い頁を転載しました。ときに、三木省吾学園長が急逝されたのは創立二十一年目の昭和五十八年七月十五日、十九期生が高三、二十期生が高二、二十一期生が高一の年でした。創立五十年目の現在、一期生から四十七期生まで八〇六二人のうち、園長先生に直接教わった二十一期生までが三二九〇人（四十一％）、園長先生没後の二十二期生以降が四七七二人（五十九％）という内訳ですが、記念誌から三木省吾先生の教えが世代を超えて白陵生の中に生き続けていることが窺い取れます。

（Y．S）

転退職教員紹介　平成二十四年三月

木本修身先生（国語）
平成十三年四月～平成二十四年三月
十一年間

二階堂聖子先生（家庭科）
平成二十四年四月～平成二十四年十月
七ヶ月間

白陵会物故者

大野正人氏（十二期生）
平成二十四年二月　逝去

村上良一氏（一期生）
平成二十四年四月　逝去

渡海幸二良氏（六期生）
平成二十四年十一月　逝去

心よりご冥福をお祈りします。